

主 題：コロサイへの最後の挨拶

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章15－18節

テーマ：パウロの最後のことばが私たちに教えてくれることとは何か？

思い返せば今年の1月からともに学び始め、これまで全部で46回にわたって考えてきたこのコロサイの手紙も、きょうが最終回となりました。本当にあっという間だったと感じているのは、もしかしたら私だけかもしれません。私たちは、この手紙を通して非常に大切な数多くの真理を改めて一緒に学ぶことができました。これから残りの部分、パウロが記したコロサイへの最後のあいさつを見ていきたいと思えます。でもまずはいつものようにみことばをお読みします。

コロサイ4：15－18

「:15 どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。:16 この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。:17 アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。:18 パウロが自筆であいさつを送ります。私が牢につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。」

●コロサイ人への手紙（概要）

きょうの内容に入っていく前に、最後なので、これまでに学んできたことをいま一度思い出してみてください。すべての始まりはエパfrasと名のつく人物からのSOSでした。コロサイの出身だった彼はパウロの働きを通して救われ、自分の町に戻った後、そこで教会を始めることになるのです。感謝なことに、その教会は最初順調に成長していました。しかし、それから数年、エパfrasの熱心な働きにもかかわらず、コロサイの教会は大きな危機に瀕することになります。にせ教師たちが入り込んで来て、教会内には間違っただけの教えが広まるようになっていたのです。ある者たちは教会内で、こんなふうには言い回っていました。人が救われるためにはキリストだけでは不十分です、割礼を受けなければいけませんとか、あなた方は儀式を行ったり、食べ物や飲み物、祭りや安息日に関するユダヤの律法を守らなければなりません。またある者たちは、キリストはまことの神様ではありません、いやまことの人でもありません。そんな彼にだれかを救うことなど到底できない、キリストだけでは不十分ですと。当初、にせ教師たちは、教会を激しく攻撃していました。キリストを否定し、最初に伝えられた福音をねじ曲げようとしていました。まるで救いにおいても、信仰生活においても、キリストだけでは十分でないかのように教え、人々を惑わしていたのです。間違いなく兄弟姉妹の間には不安が募っていました。危険が迫っていました。そんな現状を問題視したエパfrasは、コロサイからはるばる2,000キロ以上の道のりを経て、パウロが投獄されていたローマへと助けを求めに行きました。そして彼からの報告を耳にしたパウロが、その応答としてこのコロサイ人への手紙を書き記したのです。

キリストは十分でないという間違っただけの声や教えに苦しむ教会に対して、イエス・キリストこそが確かに十分であること、この方こそがすべてにまさって偉大なお方であること、パウロはその真理を何度も何度も教え、彼らを励ましていたのです。“キリストの十分性”、それこそがこの手紙を通して語られ続けてきた大きなテーマ、主題でもありました。このみことばの学びを始めた最初にも紹介しましたがけれども、ひとりの聖書注解者はこの手紙をこんなふうにはわかりやすく簡潔にまとめていました。「パウロのコロサイ人への手紙は、おそらく新約聖書の中で最もキリストを中心とした書簡です。……この手紙はキリストが最高位のお方であること、キリストの働きが信仰者にとって十分であること、キリストの支配

がクリスチャン生活のあらゆる面に適用されることを明確かつ熱心に論じているのです。」と。ここまで学んできた今の皆さんならまさにそのとおりだと確信できるでしょう。

○最後のあいさつに見られるパウロの思い：

さて、全体の流れを押さえた上で、きょう私たちが見たいのは手紙の締めくくりの部分、終わりのあいさつです。恐らく多くの人が普段余りに留めもしないような部分かもしれません。15-18節を読んだ時も、もしかしたらこの部分から何を学べるのだろうかという疑問に思った人もいたかもしれません。でも、すべてにおいて神の靈感を受けている聖書のことばは、最後の最後に至るまで私たちひとりひとりにとって大切なことを教えてくれていました。特に、この手紙を記したパウロ自身が持っていた三つ思いというものをあいさつのうちに見て取ることができます。ペンを置くその直前、彼はいったいどんなことに心を留めていたのか考えてみましょう。

1. 兄弟姉妹に対する深い愛情 15-17節

最後のあいさつに見られるパウロの一つ目の思いを15-17節に見て取ることができます。パウロの一つ目の思いは、兄弟姉妹に対する深い愛情でした。もう一度15節からのことばによく注目してみてください。パウロはまず15-16節でこのように述べていました。「:15 どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。:16 この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。」と。さて普段なら一瞬にして読み流してしまうかもしれません。確かにさらっと読むと、この箇所は単にラオデキヤの兄弟姉妹たちに対してあいさつしておいてくださいと、パウロが最後に伝言をお願いしているだけのように聞こえるかもしれません。

▶「よろしく言ってください」

また、ここに出てきていた「よろしく言ってください」ということばは、まるでパウロが「よろしく！」と簡単なあいさつ、一種の決まり文句をただ口にしてしているかのような印象を抱くかもしれません。でもここで言われていたのは、実はそのような軽いものではありませんでした。この「よろしく言ってください」と訳されていることばには、もともと「歓迎する」とか「抱擁する」、「抱きしめる」といった意味が含まれていました。このことばは、だれかを自分のもとに温かく招き入れてあげること、そういった愛情や優しさを示す態度を表していたのです。とすると、パウロは、これまでに数々の大切なことばを綴ってきて、まさにその手紙を締めくくる最後のことばとして、ラオデキヤの信仰者たちによりよくと書き送ったのです。それだけパウロはこの人たちのことを心に覚え、彼らの存在を気にかけていました。ラオデキヤに住む兄弟姉妹たちに、また特に、その地域で家庭を解放して主の働きを助けようとしていたヌンパと呼ばれる信仰者に対して、パウロは自分の愛情を進んで示そうとしていたのです。でもこうして最後にあいさつを送ったのは、ラオデキヤの人たちがパウロにとって親交の深い、親しい友人だったから、最後にあいさつを書き送ろうとしたのでしょうか？いいえ、そうではありませんでした。パウロは以前こんなことばを記しています。以前見たコロサイ2：1に「あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」と記していました。これは恐らくパウロは、コロサイの信仰者と同様にラオデキヤの人たちにも、実際に会ったことはなかったということです。手紙を送る相手は、自分と面識のある者ではなかったということです。パウロは、顔を見たこともない、直接会ったこともない者たちに対して、最後にみずからあいさつをし、自分の持てる愛情を示そうとしていたのです。

少し考えてみてください。私たちの場合ならどうでしょう？自分もよく知っている関係の深い兄弟姉妹に対してであれば、どんな時だって喜んで愛情を示そうとするかもしれません。でも顔も知らないような、一度も会ったことのないような兄弟姉妹に対して、果たしてみずから進んで関心を払おうとするのでしょうか？余り関係を持っていないような、そんな兄弟姉妹のことをいつも気にかけて、心に覚え続

けようとするでしょうか？パウロは、自分が個人的に知っている者だけではなく、教会全体を心から愛していました。どれだけ相手を知っているかが、彼の愛情や関心を示す基準にはなっていなかったのです。パウロはどんな兄弟姉妹であろうと、深い愛情を示そうとしていました。そしてその深い愛情や優しさは、時に弱って迷っている兄弟姉妹に対する叱咤激励という形でも表れていたのです。

いったいどういうことかと言うと、続く17節を見ると、もうひとりの人物に対するパウロのことばがこんなふうに記されていました。「アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように」と書いてください。」と書いています。このアルキポという人物に関して、多くのことはわかっていません。パウロは、同じ時期に記されたと考えられているピレモンへの手紙の中で、アルキポについて「私たちの戦友アルキポ」と表現していました。ですから、少なくとも彼はパウロと同じように福音の働きに熱心に励む存在だったのでしょう。また実際、注解者の中ではいろいろな考えがあります。ある人たちは、このアルキポはラオデキヤの地域教会にあって、牧会の働きをしていた人物ではないかと考えていますし、またある人たちはエパfrasがパウロに会いにローマに行った後、代わりに彼がコロサイの教会を僕する責任の一部を担っていたのではないかと考えられています。残念ながら詳しいことはわかりません。ただ間違いなく、アルキポはこの時、主から与えられた大切な務めを担っていました。忠実に果たさなければならぬ大きな責任を負っていました。しかし、そんな彼が何らかの理由でその働きにつまずいていたのです。働きの大変さに打ちのめされていたのかもしれませんが。苦しみや困難によって、弱さや恐れを覚えていたのかもしれませんが。いずれにせよ、彼は託された働きを途中で断念しそうになっていました。だからこそそんな彼に対して、パウロは主にあって受けた務めを注意してよく果たすように、始めた働きを途中でやめることなく、最後まで成し遂げるようにと励ましのことばを送っていたのです。

ここにもパウロの持っていた愛情を見て取ることができます。この手紙を記していた時、パウロは自分自身、ローマの鎖につながれていました。彼に自由はなく、大きな悩みや苦しみが常にそばにありました。それでもなお彼の心にあり続けたのは、ほかの兄弟姉妹に対する心遣いでした。手紙の最後の最後に至るまで、パウロは同じ神の家族に属する者たちに対する愛情を余すところなく示そうとしていたのです。いったいどうしてこんな態度を彼は取れたのでしょうか？いったい何が彼をここまで突き動かしていたのでしょうか？それは十分なキリストが成し遂げたみわざを、彼自身が信じていたからでした。思い出してみてください。当の本人が同じコロサイ3：11-12で「:11 そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。:12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」と、コロサイの兄弟姉妹たちにこのことを教えていたのです。パウロは、キリストの十字架が何をもたらしたのかということを知っていました。キリストのうちにあって、すべての信仰者が今、一つとされているということをよく覚えていました。もちろん以前は、人々の間に存在していたいろいろな違いというものが数多くの問題を引き起こしていました。人種の違いや文化や宗教の違い、社会的な立場の違いといったさまざまな違いが人々の間に壁を作り、対立や争い、不一致といったものを絶えず生み出していたのです。いろいろな違いというものは、人々を一つにするのではなく、人々の間をバラバラにし、引き裂くものでした。でもそんな状況が一変しました。人々を隔てていた壁や区別が、ただキリストにあって取り去られたのです。

こうしてキリストにあって救われた者にとって、キリストがすべてになりました。十分なキリストにあって、すべての信仰者が一つの神の家族とされたのです。同じことをパウロは別の箇所でもはっきりと述べていました。ガラテヤ3：28に「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」と記されています。そして、もしすべての信仰者が一つとされているのであれば、同じ一つのからだに召されているのであれば、私たちは互いの間で深い同情心を、慈愛を、謙遜を、柔和を、寛容を示そうとするのです。そして

これこそまさにパウロが立てていたあかしでした。彼はただ口先だけで真理を教えていたのではなかったのです。彼はただ知識として何が正しいのかということを知っていただけの人物ではありませんでした。彼は自分自身が信じていることを、自分自身が語っていることを、自分自身が確信を置いていることを、その真理を実際に生きていた人物でした。どんな状況にあったとしても、彼は同じ神を愛する兄弟姉妹に心を配り、深い愛情を示そうとしていたのです。たとえ会ったことがなかったとしても、同じキリストにあって、一つの神の家族とされたというその真理を知っていたからこそ、その真理を信じていたからこそ、彼は変わらずにそのような者に対しても愛を示そうとしていました。

今の私たちはどうでしょう？このような愛情や愛は、果たして私たちのうちにも見て取ることができるのでしょうか？確かにいろいろな違いは変わらずにあります。でも、その違い以上に、私たちも同じキリストによって救われ、同じキリストにあって一つのものとして、一つの家族として今を生かされているのです。だとすれば、その真理を知っている者として、その真理を信じている者として、実際にそれにふさわしいあかしを立てていこうとしているのでしょうか？みことばが教えていることに、私たちは本当に信頼して、本当にそれに従っていこうとしているのでしょうか？キリストにあって一つとされたほかの兄弟姉妹に心を配って、深い愛情を示そうとして歩んでいるのでしょうか？兄弟姉妹に対する深い愛情、それが最後のあいさつのうちに見て取れるパウロの一つ目の思いでした。

2. キリストに対する犠牲的な愛 18 a 節

次に、最後のあいさつに見られる二つ目のパウロの思いは、キリストに対する犠牲的な愛でした。4：18を見ると、「パウロが自筆であいさつを送ります。私が牢につながれていることを覚えていてください。」、こう始まっています。ここでパウロはこの手紙のあいさつというものをみずからの手で記したことに加えて、いまだ鎖につながれたままの自分自身の状況を覚えていてくださいねと、兄弟姉妹に願っていました。ここで「覚えていてください」ということばが使われていましたが、これにはもともと「何かを心に留めておく」とか「思い起こさせる」といった意味が含まれています。また、この動詞には継続を表す現在形が用いられていました。ということは、パウロはコロサイの信仰者たちに、手紙を読んだ時だけ牢につながれている自分のことを覚えていてくださいと望んでいたのではなかったということです。手紙を読んだ後、1週間だけ心に留めて、後は忘れてしまってもいいと思っていたのでもなかったということです。そうではなく、パウロを愛する兄弟姉妹たちがいつも自分の置かれた状況に心を留め続けてくれること、いつも鎖につながれている自分のことを思い起こしてくれることを願っていました。たとえどんな時であろうとも、鎖につながれている自分のことを祈りのうちに覚えていてくださいねと求めていたのです。

でも、どうしてパウロはこんなことを最後をお願いしたのでしょうか？自分の経験している苦しみに同情してほしいと思ったのでしょうか？困難な状況にある自分をかわいそうだと、あわれんでほしかったのでしょうか？もちろんパウロも兄弟姉妹の祈りを通して、励ましや慰めを受けたいという思いはあったでしょう。でもそれ以上に、このことばを発したのには大きな理由がありました。それは、パウロにとってもたとえ自分が牢の中であろうと、キリストの福音が大胆に宣べ伝えられていくことこそが何よりの願いだったからでした。どうしてパウロは、最後に「私が牢につながれていることを覚えていてください」と言ったのか——。それはたとえ自分が牢の中にいたとしても、キリストの福音が大胆に宣べ伝えられていくことを彼が何よりも願ったからでした。

パウロが獄中の話を持ち出す際には、必ずと言っていいほど福音の働きに関連していました。例えば、ピリピの中にもこのように述べられていました。ピリピ1：12-14に「:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあつて確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神の

ことばを語るようになりました。」と記されています。加えて、Ⅱテモテ2：9でもパウロははっきりとこう口にしていました。「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。」と書いています。また振り返ってみると、このコロサイの中でも、彼は同じように言っていました。コロサイ4：3に「同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。」と記されていました。つまり究極的には、自分自身のためではありませんでした。パウロは自分のこと以上に、自分を牢につなぐことになったそのキリスト、福音の働きのために兄弟姉妹たちにいつも覚えて祈っていてほしいと求めていたのです。

改めて考えてみてください。いったいどれほどパウロはキリストのことを愛していたのでしょうか。間違えなく言えるのは、キリストに従う選択をしたその歩みは容易なものではなかったということです。文字どおり数多くの犠牲を払うことになりました。彼を憎む者たちからは絶えず迫害を受け、むち打たれ、石打ちに遭い、からだはぼろぼろになりました。眠られぬ夜を過ごすこともあれば、食べ物もなく、寒さに凍えて苦しむことも何度も何度もありました。福音を伝える働きのゆえに非常に労苦し、結果として牢に入れられただけでなく、最後には処刑されていくことになるのです。自分が熱心に語る、まさにそのキリストのゆえに、彼は自分のいのちまでも失うことになりました。どうしてパウロは、多くの苦しみの中で変わらずに主に仕え続けたのでしょうか？どうしてそこまでして、すべてのものを彼はささげ続けたのでしょうか？その答えは明白でした。パウロはほかの何よりも、ただキリストのことを心から愛していたからでした。彼にとってはどんな地位も名声も、富や財産も、人からの評判や賞賛も何の価値もありませんでした。自分の望みや願いをかなえることも、快適な生活を手にすることも、たとえ自分のいのちでさえも捨てられないものではありませんでした。ただ、キリスト・イエスを知っているということ、ただ、キリスト・イエスを自分のこととして知っているということ、そのすばらしさこそ彼にとってはすべてだったのです。パウロは別の箇所ではっきりとこう述べていました。ピリピ3：7-8で彼は「：7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」とあかししています。こうしてパウロは、十字架にかかって自分を罪から救い出してくださった愛する主のために、何よりもその主を宣べ伝えるという福音の働きのために、喜んで自分自身をささげていました。たとえ鎖が彼をつないでいたとしても、決してつながれることのない神のことばを、あらゆる形で語り続けていこうとしていたのです。

果たして私たち自身は、同じようにキリストとその福音を、今何よりも愛しているのでしょうか？ただ、キリスト・イエスを知っていることのすばらしさに自分自身の満足を見出しているのでしょうか？キリストに忠実に従っていこうとすれば、そこにはさまざまな戦いは待っています。パウロのようにいのちまで取られることはないかもしれませんが、でも、多くの犠牲を払うことが問われるようになります。それでも、私たちはすべてを捨てて、自分のためにご自分のいのちをささげてくださった、十字架にかかってくださったその方を心から愛し従っていこうとしますでしょうか？この方を知っていることのすばらしさのゆえに、ほかのすべてのものに対して、私はこの方に従いますと喜んですべてをささげようとするでしょうか？ほかの誰でもありません。私たちの愛する主がご自分について来ようとする者に、その歩みを、その犠牲を求めていました。果たして私たちはそのようにして、本当の主の弟子として歩んでいるのでしょうか？それともキリスト以外の何かをいまだに愛し続けているのでしょうか？かつてパウロは言っていました。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」(ピリピ1：21)と。同じ確信を持って、私たちは今を歩んでいるのでしょうか？

そしてやっぱりパウロは口先だけではありませんでした。彼は自分が信じて語っていたその福音のゆえに牢につながれていました。そのすばらしさを知っていたからこそ、彼はすべてのものを投げ出して、そのために生きていました。そしてそのすばらしさを知っていたからこそ感謝し、そしてほかの兄弟姉妹に対してもそのことを覚えてくれるようにと願っていたのです。ひとりの神学者も、今回のこの箇所に関して、こんなことばを残しています。「パウロの手は、拘束していた兵士に鎖で繋がれていました。しかし、そんな彼が自分の苦しみに言及したのは、同情を求めるためではありません。権威の主張であり、自身に語る権利があることの保証でした。まるでこう言っているかのようです。『この手紙はキリストに仕える意味を知らない人からのものでも、自分自身に覚悟のないことを他人に求める人からのものでもありません。これはキリストのために自ら苦しみ、犠牲となった者からの手紙です。私が語るができるのは、ただ私自身もキリストの十字架を背負ってきたそれゆえなのです。』」と。これが兄弟姉妹よ、イエス・キリストを愛したパウロの立てたあかしでした。キリストに対する犠牲的な愛、それが最後のあいさつに見て取れるパウロの二つ目の思いでした。

3. 恵みに対する揺るがない確信 18b節

そして、最後のあいさつに見られる三つ目のパウロの思いは、恵みに対する揺るがない確信でした。18節は「どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。」と締めくくられていました。このことばを読んで、多くの人たちはすぐに気づくでしょう。コロサイの手紙だけではなく、彼の記したほとんどすべての手紙の最後を同じことば「恵み」で終えていました。例えばガラテヤの最後にもそう記していました。ガラテヤ6：18に「どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、兄弟たちよ、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。」と書いています。ガラテヤだけではありません。エペソも同じでした。エペソの最後6：24で「私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、恵みがありますように。」と述べています。また、それに加えてIテサロニケも同じでした。5：28で「私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。」と述べています。また、加えてパウロが書き記した最後の手紙、私たちが知ることのできる彼自身が死ぬ前に残した最後のことばも「恵み」でした。IIテモテ4：22に「主があなたの霊とともにおられますように。恵みが、あなたがたとともにありますように。」と書いています。余りにも繰り返されているからこそ、普段私たちは何も思わないかもしれませんが、考えたことがありますか？いったいどうしてパウロはこうも「恵み」ということばを最後に発したのでしょうか？どうしてほかのことば、愛や希望、慰めや平安ではなくて「恵み」だったのでしょうか？それはこの「恵み」こそ信仰者にとってのすべてだからでした。

改めて考えてみてください。神様の前に罪を犯した罪人が救われるのに必要だったのは、ただ神様の恵みでした。みことばははっきりと言っています。ローマ3：23-24に「:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、:24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」と書いていました。エペソ2：8にも「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」とありました。救いはただ神様からの賜物でした。本来であれば、神様からの御怒りだけが値した私たちが、決して値することのなかった罪の赦しを、救いを受けました。私たちの努力や行いのゆえではありません。ただキリストのみわざを通して、十字架のみわざを通して、罪深く愚かな者を愛してくださった、そんな偉大な主の恵みの力が、どうすることもできなかった私たちを罪の罰から、永遠のさばきから贖い出してくださったのです。確かに救いは最初からただ恵みによるものでした。

でも同時に、この恵みの力はこれで終わりではありませんでした。救われた後は、ではもう自分の力だけで信仰生活を歩んでいくではありません。感謝なことに、そこにも変わらず主の恵みがありました。弱い信仰者を支えるのに十分な恵みが、罪を犯してしまう信仰者を変え続けるのに十分な恵みが、試練に苦しんで悲しみを覚える信仰者を強めるのに十分な主の恵みが、それぞれのうちにいつも働いてくだ

さると言うのです。だからこそパウロもはっきりと口にしていました。1コリント15：10にこう彼は言いました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。それだけではありません。Ⅱコリントの中にもこう言っています。12：9－10に「：9しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。：10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と。

パウロはわかっていました。彼自身の力ではありません。彼自身の知恵や強さでもありません。ただ、何も値しない自分を救い出してくださったその恵みの力が、どんな時も自分を強め、励ましてくれるのだと確信していたのです。そしてただその理由のゆえに、彼はキリストのためにどんな困難や苦痛を味わうことさえためらいませんでした。ひたすらに弱さを覚えることをためらいませんでした。ひたすらに弱い自分を支えるのに、あり余って十分な恵みの力がそこにあると確信していたからです。強さのうちには働きません。弱さのうちにのみ働く主の恵みの力があることに拠り頼み続けていたのです。だからこそ、この主にある恵みの力というもの、この主にある恵みの偉大な力を、パウロは自分のこととして知っていました。そして、それを知っていたからこそ、最後のことばに選んだのです。どんな手紙を書いたとしても、どんな兄弟姉妹に対してしゃべったとしても、最後に彼はこのことば——恵みを選んだのです。そして、そうやって兄弟姉妹を励まそうとしました。キリストに従うその歩みには確かに大きな困難はあります。信仰のゆえにひどい迫害を受けるかもしれないし、さまざまな偽りの教えによって惑わされることもあるかもしれない。同じ神の家族の中で争いが起こることもあれば、自分自身が罪の葛藤を覚えて、それに負けることもあるかもしれません。みな弱さや足りなさを持っています、でも大丈夫、私たちが罪から救い出してくださったその主の恵みに、今も変わらずに拠り頼むことができると。値しない私たちに与えられた主の恵み、私たちのような愚かな者さえ変えてくださる、主の恵みの力に、私たちは拠り頼み続けることができると。だからこそ彼は「どうか恵みがあなたとともにありますように」、そう言ったのです。

このことばを受け取った人たちは、どんなに励まされたでしょう。鎖につながれて絶えず苦しみと弱さを実際に覚え続けていたパウロが、自分の力によって歩んでいたのではなく、ただ十分な主の恵みによって生かされていたということを知ったのであれば、また、その同じ恵みが自分たちのことも同じようにして支え続けてくれることを知ったのであれば、どんなに大きな希望をもたらしたでしょう。そして感謝なのは、今の私たちにとっても同じだということです。私たちもかつて罪の中に死んでいました。その状況の中で、私たちにできたことは何もありませんでした。救われた後も日々の生活の中であって、さまざまな難しさを覚えます。悲しみを覚えますし、失望しますし、罪との戦いに負けてしまうこともあります。どうしたらいいのかわからないような状況に置かれることもあります。でも、どんな状況であったとしても、今主の恵みを求めることができるということです。どの状況にあっても、すべてにおいて十分な主の恵みの力によって歩んで行くことができるということです。だとすれば、そんな恵みの力を心から求めて、恵みの力に信頼しながら、ただ主のためにすべてをささげて歩んで行きましょう。値しない恵みを与えてくださった神様に感謝しながら、ただすべてにまさって偉大なお方、十分なキリストの栄光を現す者として、ともにますます成長していきましょう。